

それは精神的にこたえますね。

あまりに悔しくて、妻にも愚痴をこぼしたところ、「一番近くにいる地域の人たちに愛されないとダメなんじゃないの」と言ってくれた。その一言で目が覚めました。自分自身も変わらなければいけない、地道に頑張ろうと思ったのです。例えば、地域で溝掃除が行われるとすれば、これまでお寺にはお誘いすら来なかったのですが、それからは率先して参加するようにして、パンツ一丁になって誰よりも働きました。お寺からのお知らせも、積極的に回覧板でお伝えするようにしました。また、自坊の清掃活動なども、それまでは寺族だけで行っていたのですが、あえて檀信徒や地域の方々に手伝っていただくようにしました。お寺と地域の間にある壁を取り払い、皆さんに「おらが寺」という意識を持ってもらいたいとの考えから、地域との接点を自ら作って、地道に信頼を得ようと思ったのです。さらに日蓮宗といえは、行脚という武器もある。そこで、平成十三年から毎月二十八日に唱題行脚を継続して行っています。参加者は檀信徒だけでなく、まず、私の活動に理解を示してくれる一般の団体や個人の方々等も参加します。活動は十七年に及びますが、参加者は優に千人を超えます。テレビにも取り上げられて、完全に地域の恒例行事になっていますね。ほかにも青少年育成に向けたNPO活動にも力を注いでいます。

——平成十九年からは冬至の日に水行を行う「冬至水行祭」も開催していますね。

日蓮聖人は「教主釈尊の出世の本懐は、人の振る舞いにて候いけるぞ」と述べられています。釈尊がこの世に生まれてきたのは、人の振る舞いを正すためだという教えです。釈尊や日蓮聖人の末弟である私も、その教えを実践しようと、平成二十年から始めたのがこの水行祭です。皆さんの振る舞いをただす契機となるよう、日本の神代に端を発した「みそぎ」を一人でも多くの人に実践してもらいたい、一年の節目に心の垢を洗い落としてもらいたいと考えました。近年は「水行体験」「アチ修行」と銘打って、こころした活動を行うお寺も増えてきました。真成寺でも、当初は参加者を増やしたいと、「水行体験」をうたっていた時期もありますが、本来「修行」に「体験」なんてものはない。「修行」は「修行」だと思いきり、ブレない心の中心軸、床柱をシツカリと立て、「水行体験」から「本格的な修行」という位置づけに方針を変えました。一つ一つの所作も正式なやり方につとて行います。また、「遊びではありませんよ」という意味で、書面で同意書もとりますし、水行を行う直前にも、口頭で確認も行います。そうした本格修行の方式が受け入れられたようで、一度参加するとやみつきになる方も多く、ほとんどの方が毎年参加されるようになりました。第一回の参加者はたったの十六名でしたが、十回を迎えた昨年は全国から二百五十名を超える方々が参加される一大行事に成長させることができました。

——昨年は開創五百年の大きな節目にあたりましたね。四日間にわたって記念の行事「開創五百年祭」を盛大に開催されたとお聞きしています。

この五百年祭に関しては、実行委員会もつくり、お檀家さんやスタッフなどかなりの時間をかけて準備をしてきましたが、芋づる式に仲間が増えていって、多くの方のご協力を得ることができました。また、四日間、千五百人もの方々に来寺いただき、五百年の重みを、地域の皆さんと共有することができました。あのときほど、お寺やお坊さんとしての可能性を感じたときはありません。

——今後の展望をお聞かせください。

世の中に老舗と呼ばれる会社や店舗なども多数ありますが、そうした老舗は、昔ながらの伝統をただ受け継いでいるわけではありません。それぞれ時代に合わせて新しいことにも挑戦しています。逆に言えば、新しいことに取り組んでいるからこそ、移りゆく時代の中でも生き残ることができているのだと思います。お寺も日蓮宗の教えという普遍的なものもしっかりと守っているながら、檀信徒や地域の皆さんに対するアプローチなどは、時代に応じて変えていかなければいけないと思います。では、私自身はどういうお寺を目指していくか。よく「葬式仏教」という言い方があるじゃないですか。

私はあの言い方に不快感を感じます。もちろん、葬式や祈りは人間として最も尊いことの一つですが、「お寺はそれしかできな

い」という世間のイメージがある。それを覆したいと考えています。そこで私が理想として掲げているのが「慈しみ、笑み、和み」のあるお寺。慈悲の気持ちをもち、葬式・法要にも魂を込めるし、社会貢献にも尽力する。そして、お寺に集まった人たちが自然と笑みを浮かべ、気持ち安らぎ和むような取り組みも充実させるとともに、失われつつある日本人の心も伝えていきたい。それが次の五百年を迎えるための基盤になると考えます。花祭りなど仏教行事の掘り起こしをはじめ、さまざまな地域活動にも率先して参加し、地域に根差したお寺、人の人生に寄り添える僧侶としての役割を担える存在になりたい。これからも、人の振る舞いを正すという、私たちの使命を全うしながら、時代環境に合わせた寺院運営を寺族とともに行っていきたいと考えています。

合掌 副住職 谷川寛敬



